

藩祖 酒井忠勝

⑥

酒井忠勝は正保4（1647）年10月17日、江戸藩邸にて病気で逝去しました。享年54。遺骸は直ちに庄内へ運ばれ、11月23日大督寺にて内葬（火葬・法要）を終え、小真木野にて脱葬毘の葬礼が行われました。翌々年の慶安2（1649）年には忠勝の遺骨を高野山



酒井家庄内入部400年

へ分骨し、御宝塔が建立されました。なお、家臣3名が殉死しています。忠勝には嫡子の忠当をはじめ9男3女の子女があり、忠当が庄内藩主となります。庄内藩主となった忠当は、藩政全般にわたる諸法

639（75）は松山藩主（2万石）に、七男の忠解（1643〜68）は大山藩主（1万石）となりました。

紆余曲折 忠勝の子供たち

忠勝は亡くなる前、新田開発して得た増石分から忠当の兄弟へ分知するように遺言を残していました。幕府はこれを認め、支藩が創設されました。三男の忠恒（1



【写真②】酒井忠恒肖像（江戸時代、絹本着色）



らせられ、今に至るまで人名・老之助。官途名・従五位下（大学頭）以後7代にわたって存続し幕末を迎えます。忠恒の肖像【写真②】は、歌舞伎役者のように髪を逆立て、腰に直刀を二本差しています。派手な着物は、当時流行した「かぶきもの（異風を好み、派手な身なりをし、常識を逸脱した行動に走る者たち）」を思わせます。

紆余曲折 忠勝の子供たち

話がつづられています。所用の具足【写真①】もかなり大柄なもので、その逸話を裏付けているように思います。なお、万治3（1660）年2月、忠当が鶴ヶ岡城中で逝去すると、嫡子の忠義が跡を継ぎます。松山藩主酒井家は忠恒（幼

【写真①】紺糸威四枚胴具足（酒井忠当所用、江戸時代前期）



時絵硯箱（酒井忠解所用）
梨子地に高時絵の硯箱。蓋表には紅葉に鹿を配し秋の様相を表している（江戸時代前期、道林寺蔵）

山で鷹狩の途中傷寒により24歳の若さで急逝しました。継嗣がなかったため翌9年に断絶し、大山領は大領幕府領）となりました。また、天和2（1682）年、忠勝の次男・忠俊の子忠高は余目5千石を分与さ

れ、幕府の旗本・寄合となりましたが、以後3代とも天折したため、元禄9（1696）年に余目酒井家は断絶し、天領となりました。これまで6回に分け、忠勝の生涯を時間軸に沿って紹介いたしました。なお、次回は逸話を踏まえた番外編を紹介する予定です。（致道博物館学芸部長・本間豊）